

優駿の榮冠めざして

會心の日

田中康三

—優駿の榮冠めざして—

第九次イェリニューが勝つたときのダービーに、私はタンダイに乗つて出走した。それが私の最初のダービー出場の経験であつた。その後、私はメイレキヤナイトステーツに乗つてダービーの経験はかさねたが、惨敗をくり返して、ダービー制覇の榮冠は、かつての私にとつて、おぼつかない遠い夢も同ぜんであつた。その夢が、いま、ゆくりなくも現實のものとなつた。信じられないくらいに簡単に――。

率直にいつて、私は何の苦心も別だんの努力をほらつたというわけでもない。私だけについていうならば、私はただ與えられた幸運を甘受したというだけのことにと過ぎないだろう。この一戦がダービーだからといって、乗役としての私が特別つに心血をそそいだというような謂われもない。あらゆるレースに、全力をあげるのが乗役の本分のはずだから。もとよりマツミドリを、これまで仕

上げた茂木さんの苦勞は並大抵ではなかつたにちがいない。そしてその苦勞を、萬一にも私がレースで生かすことができないようなことがあつてはならぬと念じはしたが、いわばそれは、あらゆるレースに臨んでの當ぜんの乗役の心がまえにすぎないともいえるだろう。

中山から第一次東京の初めごろまで、ダービー制覇はまだ私にとつて遠い夢ではなかつた。いままでのダービー出走のどの場合よりも、あるいは善戦できるのではないかと、微かな期待はあつた。しかしマツミドリで勝つてというほどの力強いものを、その頃の馬の氣合ひに感じとることはできなかった。それが第一次の東京ごろから、レースに乗るたびごとに、はつきり馬の氣合ひの變つていくことに、私はひそかな驚きをさえ覺えた。手綱へくる手ごたえにも、一回ごとに頼もしいものが感じられてきた。あきらかにマツミドリはコンディションの

上昇線をたどつていたのであり、ダービーへむかつてこの馬の調子を高めていきつたあつた茂木さんの馬の作り方は、着着として效を奏しつつあつたのだ。

昭和二十二年六月八日――。

競馬再開後、初のダービーのその日はきた。文字どおりマツミドリは完調そのものだつた。落ちついた氣もちで、マツミドリを、私はスタート・ラインへ乗りすすめた。

發馬機がガカリと上つた。出足のいいこの馬は、これまでのいつのレースでもそうであつたように、一瞬の淀みもなく満足なスタートだつた。

イーストパレードが鼻をきつている。馬なりにマツミドリは進んだが、審判臺前でマツミドリはすぐもうイーストパレードに並んだ。サラブレッドらしいマツミドリの闘志を、その好調とともに早く私は感じとつた。

勝てる！ 私は直感した。何かこころよいものが、手綱つたいにさつと馬上の私へかよつてきた感じであつた。

それから私は、一たん並んだイーストパレードの逃げるにまかせて、控えぎみに馬をためて二番手について進んだ。別だん私にせりこんでくる馬もなし、私は思いのままのコースを、馬の力と調子だけのペースでマツミドリを走らせた。何のあせりも苦心もない。相當ためて進んだのだが、坂へかかるとイーストパレードの速力がにぶつた。それに釣られてベ

ースをゆるめる手もないから、そのまま私は先頭に立つた。背後に肉迫してくるほどの馬の氣配もない。第四コーナーをまがって追込み直線。依ぜんとして手綱の手ごたえに何の不安もない。

最後の力走。来たな、とその時うしろから激しく迫ってくるもののあるのを知つた。はじめて私はマツミドリの脚力を一ぱいに伸ばさせた。二位の馬の脚が、するすると伸びて追い越つてきた。トキツカゼの強襲であつた。

こぶしを固めて私はマツミドリを押しまくつた。勝てる！ はやくも審判臺前で直感したそれが、なお私を見棄てなかつた。それだけ信頼すべきものが最後の脚勢に残されていたからだつた。

せり合ひは激しかったが、たちまちにゴールだつた。勝利の確信のままゴールに私はとびこんだ。マツミドリは勝つたのだつた。そして私にもまたダービー制覇の成る日はきたのだつた。

もとより私の手がらではない。マツミドリの實力と、マツミドリをこれまで仕上げた茂木調教師のたまものだ。

騎手を志願して、十六の歳から二十五歳までの八年間、いまは亡き北郷五郎先生のもとに私は修行した。北郷先生に亡くなられて一時は茫ぜんとした私に、それから目をかけて下さつたのが尾形先生だつた。それからの六年間を、私は尾形先生に學んだ。この兩先生から學んだものをもつて、幾らかは茂木さんの調教師

—優駿の榮冠めざして—

お手傳いをしたとはいえるだろう。しかし、それもみんな兩先生のお力である。それと茂木さんの努力とが、きょうのこ

敗因

佐藤嘉秋

ブラウニーの眞價

橋本輝雄

四歳農賞にマツミドリを六馬身はなして快勝した戦績からいえば、トキツカゼがダービーの榮冠を占めたとしても不思議はなかつたわけである。それが却つてマツミドリに頭の差で惜敗したというのは、自分として残念でなかつたとはい

もつともレースを終つてきて馬をおりたときに、ふと自分の頭を掠めたのは、もう少し違つた乗り方もあつたんじやないかな、という惑いだつた。というのは、直線、私が最後の追込みに移つたとき、先行するマツミドリとの差は優に五馬身はあつた。あれをもつと早く追込んで、ゴールまでのせり合ひの距離をも

んは、農賞當時と大い同ていどではあつたが、マツミドリがあつたときよりも一だんと調子を上げてきていたのだ。とすればトキツカゼが追込んで頭だけ足らなかつたというのも、ぜひないことという

はかはない。

スタートも、コースのとおり方も、どこがまずかつたかを、私は思い出すことができない。全力をあげて私は戦つた。そして敗れた。私に悔いるところはな

敗因はどこにあつたのだろうか？トキツカゼのコンディションが落ちたと見ている人もあるようだが、大たい農賞當時でいどの調子には恢復してしたのである。それなら、なぜ最後の追込みで農賞制勝のときのような鮮かな脚が使えなかつたのかと反問する人もあるかもしれない。それはレース全たいのペースが、ダービーでは農賞よりもはつきり早かつたので、農賞のときのように最後の餘力をじゆうぶんには残していけなかつたから

だ。そのために追込みに鮮かな脚をみせることもできなかつたので、馬の調子がさがつたからだというわけではない。乗り方としても私に決して心残りはない。

敗因というところに、もう一度問題を引

きもどすと、トキツカゼのコンディションは、農賞當時と大い同ていどではあつたが、マツミドリがあつたときよりも一だんと調子を上げてきていたのだ。とすればトキツカゼが追込んで頭だけ足らなかつたというのも、ぜひないことという

つ悪い條件がふえた。二日目の競馬を使つたあと、馬に蟲が湧いたのである。このままダービーへ行つたのでは、それこそどんな良馬場でも期待したたけの戦績はあげられないに違いない。そう思うと、私は氣が氣ではなかつた。そうかといつて、ダービーまでにはや幾日の餘裕もない時期に、蟲かだしをかけて、せめ馬を休むなどということは思いもよらないことだつた。そこでレースに差支えないでいどに蟲かだしをかけた。

注意している、厩でブラウニーは軽い咳をしている。ないらかもしれないと思つて、またはつとした。しかし、それほどの咳でもない。何が原因の咳だつたか、今でもよくはわからない。

いろいろと氣苦勞はしたが、ダービーのその日がかかりと暗れて、完全な良馬場だつたことは、私にとつてもブラウニーにとつても大きな好運だつた。

私は力闘した。レースとして違算はな

かつたつもりである。直線へはいつてからのブラウニーの脚力は、關西馬の新鋭を代表するにじゆうぶんなものがあった。マツミドリ、トキツカゼの兩頭に及ばなかつたといえ、出走馬二十四頭ちゆうの三位にくだりこんだという事には、この馬の實力の片鱗がうかがわれてもよいはずである。私としても武調教師から頼まれた面目は立つたわけである。

重馬場なりせば

光野史郎

レースを見ていた人の眼に、アヤニシキはコースのとり方などで相當に苦戦したように映つたらしい。げんに私にそう云つた人もある。しかし實際はそうでもない。

第一コーナーで、ビツクウエルとケール、それからシマタカだつたと思つたが、この三頭がぶつかつて、そのはずみをつくつてアヤニシキも馬群のなかに揉みこまれそうになつたが、うまく内枠があつたので、すかさず私は内枠へ抜けて大した影響を受けずにすんだ。あのときなども見ている人は、アヤニシキが苦しい立場におちこんだと感じたかもしれない。しかし私として、あつていどのことが勝敗にひびいたとは思わない。アヤニシキの實力を發揮させるために、私は大

しかし、この馬が最善の状態では、少の残念さを覚えないわけにはいかない。完調なら、おそらくはもつと目ざましい成績をあげることでもできたに違いない。ダービーには二著馬から六馬身はなされての三著ではあつたが、いつかはこの馬の眞價が餘すところなく、もつとつきりと示し出される日もあるだろう。

思わぬ不利

内藤 潔

私がブルーホマレの騎乗をたのまれたのはレースの一週間まえからだつた。馬の調子には申分がなかつた。しかし今までの成績だけでいへば、何としても強敵の多すぎる感じだつた。重馬場にでもならないかぎりブルーホマレの活躍する餘地は少いと見るほかほなかつた。私はただ、この馬の實力一ぱいのレースさえてきたら、それでいいと思つた。私にはなかつた。ところが事實は、かならずしも實力一ぱいの戦いをしたとはかりは云えない結果になつてしまつた。第一コーナーで、ケールとビツクウエル、それからもう

にはいかない。しかし、もう一度おもひ直してみるのには、第一コーナーで私が招いた思わぬ不利も、致命的と呼ぶにはあまりに小さい。遺憾のないレースができたとして、先著馬との差をはたしてどれだけ詰め得たろう。かりにアヤニシキを抜いたとしても、マツミドリ、トキツカゼにどれだけ肉迫できたか、それを思えば心もなつた。残念ながら勝てるレースではなかつた。

これ、そのくりごとの一つにしか過ぎないが、もしも馬場が重くさあつたならば、あるいはアヤニシキで大勢を一變させていたかもしれない。重馬場でさえあつたならば勝てないまでも二著以下にはさがるなかつただろう。それほどアヤニシキの重馬場得意には自信があつた。重馬場上手といへばブルーホマレが

それにしても、ブルーホマレへの投票数は意外だつた。三著したブラウニーの四分の一の票数にも満たず、ブルーホマレよりも少い賣れ方の馬は、ほかに幾らもいなかつたからである。すくなくもブルーホマレが、ダービーでそのようにしか評價されない馬でなかつたことを、實戦によつて私は立證したのである。せめてもそれを私はよこびたい。

今ここに、こと新しく競馬の娛樂性については、書くまでもなく、競馬をちよつとでも知つてゐる者にとつては無敵なこと、かえつて諸氏のお叱りをかうかも知れないが……。

過去はもちろんのこと、現在でも、まだ競馬法なる法律が嚴存する以上、競馬開催の目的は馬匹の改良、優秀なる種馬の選定にあつて、それ以外の何物でもないのである。

それでは何故に、正面から競馬のための競馬、娛樂のための競馬としての看板を堂々と掲げることができないのか。この點について、私の考へるところを披歴して讀者諸氏の御参考に供したい。

では政府が娛樂というものを、生活に必要なものに考へないからであらうか——というのを第一に考へるときに、以前はそれほど娛樂というものを重要視しなかつた、ということも事實のようである。

戰爭の當初におこなわれた享樂の追放は、各界を吹きまくり、高級なる演藝、料亭そのみではなく、娯

競馬の娛樂性

— 清見 健 —

樂と名のつくものはすべて閉鎖され、戦力に向けようとしたのであるが、反對に社會は味氣ない沙漠のような活力素のないものとなり、生産は沈滞し、活氣なく、急速度をもつて敗戦の方向にすすんだのである。

この豫期せざる結果に、はじめに娛樂の重要性を理解し、健全娛樂の振興を圖つたのであるが、そのとき遅く、あらゆる彈壓によつて、娛樂面の健全なる芽は枯れていたために、娛樂の偉大なる活力素としての効果を發揮する餘地がないままに、終戦となつた。このにがい経験からして、娛樂の重要性は爲政者にとつて、骨髓まで沁みぬいてゐる筈である。

ではつぎに、競馬は健全娛樂であるかどうかについて考へてみるに、この點になると、現在のままでは、簡単に、健全であるとは答へられない状態にある。

過去一年を振り返つてみるに、馬券賣上高は、最高三千萬圓を上まわつたのを峠として賣上は頭打の状況で、次第にその賣れゆきも低下しつづめるのは、各界にわたる購買力の低下もさ

ることながら、施行方針の缺點が現實に表面化した事象として、再考を必要とする。投票無制限の弊害が、いちじろしく最近になつて表面に現われ、健全競馬に一汚點を印さうとしている。

加うるに、サラブレッド種の競走馬の價格の狂騰は、八十萬圓を超える馬の出現、ならびに飼糧の値上りによる管理費の値上等々は、賞金目當の正直なレースによつて、それを賄えぬ状況におちいりつづめる。馬主諸氏は馬券の勝負によつて、それを賄うようなことは決してないと信ずるが、理想的な馬の價格は、賞金を基礎としたものであるべきである。そうした馬によつて行われる競馬こそ健全なものである。

終戦後の各界に横溢した、あはれあたる的な生活態度、經營状態が、各馬生産者におよんで競走馬の法外な値上りとなり、ひいては競馬界をして、かつての賭博的專業へと無批判に前進させる恐れのある現象にあるといわなければならない。

過去の、軍馬資源の確保としての最高目的をうしなつたいま、輕種産馬界にとつて、唯一の目的たる健全娛樂の提供という途をふみあやまつたときこそ、競馬の必要をなくし、反對に害毒のみの存在となつて、世論のまえにふたたび起きあがることのできない深渊に埋没するであらう。

そうしてけつきよく、輕種産馬界は、一時的の計算のために、おのれの首を締める結果になるであらう。

現在のあの競馬場の雰囲気は、まるでどこかの賭博場にあるそれと一つもちがわぬ。現在のままでは決して健全娛樂として誇るにたるものではない。私の知る範圍における、いずこの國の競馬場の氣分よりも悪いものである。堂々と眞正面から娛樂を旗印として掲げきれない原因が、このあたりにあるのではないであらうか。

當事者は、根元的なる物の見方をとりもどすべきである。いまこそ競馬興廢の岐路である。もはや、過去の行き方そのままを繼承するのみにて事たれりとするときではない。

競馬の生命は、健全なる娛樂の提供と共に、今ひとつの條件は、より大衆性のあるものであることを今後には絶対に必要とする。民主主義の下、大衆性のないところに繁榮はありえないことは事實が雄辯に教えるところである。健全なる競馬としての眞面目を發揮するときこそ、輕種産馬界、競馬會の事業が地につくときであり、國が必要とするときであることを明記して、關係各界は一丸となり、今日までの消極性をうち破つて、健全競馬をうちたてるために、積極的な運動を展開すべきである。

昭和二十二年春季、それは私にとつてまたとない思い出がいっぱい...

アサフジとマツミドリ

茂木 爲二郎

馬に強みがあるような気がして... 茂木君のところにいた馬です...

昭和二十二年春季、それは私にとつてまたとない思い出がいっぱい...

目黒記念に快勝したアサフジは、前に高木君のところにいた馬です...

キセロヤオホヒカリを手離したばかりのところ、何となく心細くなつて...

ハシデの軽い有利さがありました。それにしても結果は文字通り堂々たる快勝でした...

東京優駿競走

昭和十九年の第十三回で中断されてきた、わが國競馬界最高の榮譽を...

午後三時八分發馬機は上つた。戦前の豫想どおり良馬場での優勝候補マツミドリが...

マツミドリ

父 カブトヤマ (母) シアンモア

父 ダイヤモンド (母) ビューティフル

母 榮華 (母) プライオリ

母 ガロン (母) インタグリオー

なほ、マツミドリの競走成績は、昭和二十一年秋季東京競馬三歳馬競走に...

中山初日Aサラ四歳、第八日Aサラ四歳優勝、著外一回(昨秋東京第四日Aサラ三歳、...

第六日 (六月八日) 晴 馬場良

Table with columns: 馬名, 性別, 重量, 騎手, 速度, 差, 投票数 (複), 投票数 (単)

Table with columns: 馬名, 性別, 年齢, 成績, 備考